

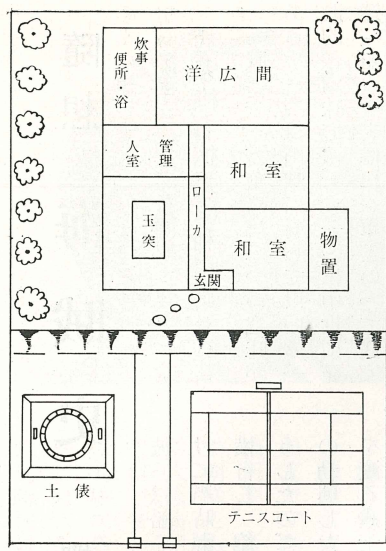
続 宇治川夜話 (亜米三倶楽部の回想)

黄 旗 亭

神戸海洋气象台と、諏訪山武徳殿を結んだ点を二、三百米南下すると下山手六丁目の一角に我等の「亜米三倶楽部」があった。この附近今でも風致地区に指定されて居る所だけに、その頃は一層勝れた環境に恵まれ神戸の誇る景勝の地であった。西川さんの御邸からも近く、中山手の済美寮とは目と鼻との間にあり、全店員に最も親しまれた曾友懐古の場所である。今回はこの「亜米三倶楽部」を廻施塔に古い憶をめぐらせて見度い。ここに書いた見取図は、勿論

記録も資料もないうろおぼえの記憶から拾い出したものに過ぎぬ。以下数々の錯誤や思い違いは本駄文と共に敢えて御寛恕を願うものである。

亜米三倶楽部と云う変わった名は深い由来はない。前の居住者が永年表示して居たものらしく、鈴木商店が之を入手した時、「亜米三何々から買い取った物件」と云うのでついそのまま呼びならわしになった。「オリビヤ」と云い「亜米三」と言い何れも単なる愛称に過ぎず、固苦しい事の嫌いな鈴木人らしい簡単な呼び名である。正式には「合名会社鈴木商店寮舎及体育設備控家」という長たらしい名称で登録されて居たのを憶えて居る。



亜米三倶楽部見取図 (二階略)

大正八年春三月の創設といえ、前の年、米騒動の

異変があったが人の噂も七十五日、そんな出来事は蚊に喰われた程も痛痒を感じず、鈴木商店意気冲天の時期であった。店員の数も茲数年の間に急激に膨れ上がって行った。若手の俊秀が各地より網羅されて雲の如く、若き鈴木商店は情操的にも肉体的にも大いなる進展の途上にあつた。カネ辰裏面史に亜米三倶楽部の存在は欠く事が出来ない。

倶楽部の開設によって遽かに運動熱が高まり、先ず相撲部、庭球部が期せずして誕生した。相撲部の事は前述したので重複をさける。茲では庭球部を主体に又その他の運動部やそれにまつわる話を思い起して見度い。その前にも一つ、亜米三倶楽部として特筆せねばならぬ大きな役割のあった事を書かねばならぬ。

倶楽部が出来た翌年、即ち大正九年の正月に、元旦の年賀式を倶楽部で取り行われようという新しい企画であった。勿論今迄に例のなかった事で、これ迄お正月と云えばいぬい大手の本邸や重役や支配人のお宅へ参賀したものが、今年からは元旦の朝、倶楽部を集ってみんなが一目出度うを述べ合い、屠蘇を祝おうというのである。之れは大層清新で能率的で新興鈴木商店にふさわしい

意義を持つ事になった。一階奥の洋式広間に卓を並べ、純白のシーツの上には一度に何十人もの人が乾杯出来る様、銀のコップと祝膳が用意された。正面にお家さんと若主人、左右に金子、柳田の大御所、そして西川、森の両支配人が着座される。私は今でもありありとこの時の身の締まる様な感激を思い出す事が出来る。

お家さんの満ち足りたお顔に微笑が漂い、口数も少く、「皆はん、昨年はよう気張っておくれなした、今年も一つ負けん様に気張っておくれやすな……」。とそして「明けましてお目出度うさん」と発声されて一同がそれに和した光景をいやと云う程憶えて居る。

この年賀式も仲々一度では済まず、数回に分けて登席されたので正午を過ぎても終了しなかった。独身者や坊んさん等には別に酒肴料がお年玉として下された。気の合う者同志は別室で改めて飲み直す。碁将棋に興ずる者、玉を突く者、そして華やかな「かるた」取りに歓声を挙げる者、亜米三倶楽部の元日の夜は何時果てるもしれぬ歓興が渦を巻いた。管理人の浮田紋次氏夫妻が転手古舞いをしながら嬉しそうに悲鳴

を挙げて居たのが忘れられない。

さて亜米三倶楽部として一番多くの人に親しまれたのは何と云っても庭球の面白さである。軟式庭球の爛熟時代で、地下足袋に鳥打帽や鉢巻き姿で服装も思い思いと云う気安さ、多くの人は備え付けのラケットで一度は赤Mのゴムボールを叩いたものである。休みの日は云わずもがな、朝の出勤前の一時や日の長い夏の夕方等店の帰りに充分練習が出来る。私等坊んさん連中も気安く仲間入りが出来たが、コート上の整備や

用具の仕末は私等の担当であった。ネットを張るにも現今の様にギア付きのドラムをハンドルで締める様な気のきいた物ではなく、二、三人で力まかせに支柱にしばり付けてピンと張るのだが中途でたるむ事も度々であった。傑作なのはラインの白線引きである。大きな茶瓶に石灰の粉を水でとかし、コートの上を中腰で歩き乍ら徐々にたらし線を描く、仲々うまく行かんもので処々蛇がうねった様になったり、太さ細さがまちまちになったり、思えば幼稚な方法であった。コートが荒れた時はコンクリート製の重いローラーを引きづり廻して地ならしをしたものだがこれは一番くたびれる。湯茶のサービスから掃除に至る迄雑役は何時代の若者も受持ちで、これあるが故でもなからうが我々も大きな顔で仲間入りをして行けた。五十年前の長閑な風物詩である。その中レギュラーの顔ぶれも段々充実し、

【説明・右から後から前へ】



- 近松 嘉吉
- 村井 順三
- 安孫子哲次郎
- 大石利兵衛
- 菊池 武雄
- 久野 武雄
- 肥後誠一郎
- 百留 永井幸太郎
- 明神 秀吉
- 西川 政一
- 三木 秀次
- 伊藤小一郎
- 松島 武

店の庭球人口も増えるに従って行事も多彩になり、先ず春秋には店内の紅白試合が催され、昔取った杵づかのオールドプレイヤーの出陣等もあり、盛り沢山の賞品や珍プレーや余興演出で湧いた。対外的には他社チームを招待して対抗試合をした。そんな時は大勢の応援団も練り出して声援する等華やいた行事が催された。

こんな昔話を語り合えるのも阪神地区の辰巳会では近松嘉吉、石本喜久次の両氏だけになった。他は事改めて云う迄もない。庭球部を語るとなれば、先ずこの人達に脚光を当てねばならない。近松嘉吉は八幡商業時代からの本格派選手、本店では久しく雑穀部に勤務して沢村さんの囑望が懇かった。昔から万年青年の異名通り今も頭髮黒々としてこの人がこの年かと驚く。永年大丸百貨店の秘書課長として、ついこの間迄重役室へ出勤して居たが漸く後進に道を譲って、今は悠々自適の身、七十迄働けるとは矢張り運動で鍛えた体がモノを云うのであろう。亜米三では副将格の前衛をつとめ、華麗なプレーと果敢な動作が印象に残る。特に駆引がうまく足音をパタパタ立てて敵陣を牽

制、彼のフェントに引掛って苦汁を呑まされた例が多い。

石本喜久次は富士商事の御大、大阪の中心部市庁舎の近くに拠を構え、帝人傘下の特選会社として活躍、仕事もスポーツも現役から一歩も退かず、ラケットをクラブにかえて、今もお頗るハナ息が荒い。往年のテニス振りは豪快なフォアアのストロークを得意としなぐりつける様なショットを放つ、野性味豊かなプレーぶりとも猛烈なサーブは定評があった。鹿田、大石と伍して大将副将組の後衛をつとめて居た。今もゴルフに往時の片鱗を示して居るが、果たしてガットで球を打つ様にクラブがいう事を聞いてくれるかしらん。

も一人、富山の村井順三が居る。筆者の兄貴分に当る人、だからといって特筆する訳ではないが古武士的な風貌さながらに鞭辺無倒の如く見えて、其の実詩情を解し、ものあわれを知る風流居士、鳥羽商店の社長という座に在りながら、給料は平社員並しか取らぬと云う変り種。富山地方ではロータリー会員として隠然たる徳望と実力を兼ね備えた名士である。後で述べる明神秀吉とは相撲部の選手も兼ねて何れが本職か判らぬ様な何でもこなせる運動神経の

持主、そのプレーぶりは多少ゴツゴツした感がないでもなかったが仲々芸は細かく対抗試合の時等は欠く事の出来ぬポイントゲッターであった。

その村井と明神とは庭球の順番が廻ってくる間、隣の土俵で盛んに稽古を続け、番がくると二人共「まわし」一つの素裸でラケットを振り舞わして他所では見られぬ珍風景を演じたりした。

三人共、既に稀寿の峠にさしかかり乍らふり向きもせず「先づ健康」にモノ云わせて永遠の若さを誇って居るのは流石にスポーツあつての事と深く敬意を表しておく。三方に対する提灯持ちはこの位にしておこう。

筆者の乏しい記憶とせまい視野に写った選手の傍を偲んで見度い。この稿以外にも多くの人々の去来があつた筈だが忘失と漏れ書きは平にお詫びする他はないとして筆を進める。武久愛三、直輪経理部勤務庭球部創始頃からつと工事部の菊池と組んで大将格の座にあつた。鼻下に薄つすらとコールマン髭(その時分こんな言葉はない)を生やした美丈夫、身の丈抜群で丸太ん棒の様な腕

から繰り出すフォアアのストリートは破壊的な威力があつた。小樽高商時代本チャンであつただけに年期が入つて居た。外為の管理、相場、換算に精通、タリフの大半を空んじて居たと云う鬼才、惜しむらく三十になるやならずで急逝した。

武久のパートナー菊池前衛は屈指の伊達男、工事部では緻密な設計と取り組んで居たが性格をそのままに合法華麗なポーズでポイントを決めて行く、彼のスマッシュとパッシングの正確さと華やかさは追隨するものがない。勝ち残り、負け退きで練習して居たが、この組が平均勝率が高かつた。鹿田信夫が間もなく大将格の後衛になつた。店員の異動が多かつたのでカッブルは固定する訳に行かず、其の都度組合せが変る。鹿田は強度の弱視であるにも拘らずコートに立つと人が変つた様に相手方を睨み付け、得意のロップを左右に打ち分けて敵を翻弄し粘り抜いて勝を制する。この人常に独特のショートパンツ姿で毛脛丸出しの豪傑、ポルト部では整調を漕ぎ、斗酒なお辞せざる酒豪であつた。大石利兵衛、通名「天野屋」忠臣蔵に縁のある名を二つも持つて居る、大時代な名前の利兵衛さんと呼ばれるのを

リムピックに栄光の脚光を浴びられた記憶はまだ生々しい。
兎もあれ、亜米三倶楽部に美しい青春の一時代を印した事蹟はこれ等の人々と共に永く我等の脳裡から消え去る事はないであらう。

茲迄書き上げてきた時偶然にも、近松氏から別掲の庭球部の写真をお貸与された。大正九年頃の物と思う。勿論一部の人達より写つて居ないが珍重に値する物である。読者諸兄、記事と写真により遙なる日の友の傍や、古きよき時代の追憶の一助にもして頂ければ筆者の喜び之れに過ぎるものはない。終章として囲碁部の一端を書き添える。倶楽部の和室に碁盤が多面用意されて同好の士が徐々に顔を揃えてきた。先づ筆者所屬部の御大、横山正躬、加藤廉之助

太田広輔、武藤作次、西岡勢七等の有段者級から中級の若手連中もそろそろ集り出して日曜日の午後等は仲々盛会であつた。時には競技会を催し、天狗の鼻をくらべ合う事も度々あつた。

最後の玉突き場は余り大した発展はなかつた。と云うのは台がかなり年数の経つた中古でその上管理者が素人であつた故に手入や調整が行き

厭がるので面白半分囃やし立てたものだ。名前に似ず頗るスマートなタイプ。その後衛ぶりが若さがはち切れる様で荒けずいな技術が却つて魅力があつた。肥後誠一郎、この人程人は少かるう。或る意味では庭球はこの人の本職でないかも知れぬ、それ程多種多芸な人、剣道三段、本店在郷軍人分会副会長、野球部イーストクラブの一塁手等行くとして可ならざるはない。後衛をやらせてもその巨軀に似合わず小廻りがきき、時には前衛に商売替えしても立派にこなして行く、倉庫部中堅のバリバリで社交性に富み、それで居て親分肌で仲々よく部下を可愛がつた。軍人精神と商売根性が同居した様な人柄であつた。伊藤小一郎、前記肥後と同じ様なタイプの人。頗るユーモアに富み、この人に接して居ると春風

蹄蕩身辺自ら和む様に覚える。矢張り前後衛何方でも出来るなまくら四つ、野球部にも籍がある。一寸見にはスローモーに見えて其の実小手先は仲々見事なものがあつた。森武後に松島と改姓、余程の活動家らしく、じつと落ち着いた姿を見た事がない。色あくまで黒く、筋骨隆々黒豹の様に素早くラケットの両面を巧

みに使い分けた。百留某、名前をもぢつて百ルーブルの仇名があつた。明神秀吉はくねくねした柔軟な体で一風変つたポーズ、彼の相撲と同じ様にコート中ピョンピョン跳ね廻る。敏捷な事森と通ずるものがあり、重宝な前衛であつた。其の他学生選手の本三秀次は力まかせの荒い手法、石川学位はカットのサーブに特技を有する等何れも印象に残る人々であつた。楓さんも度々コートに立たれ、瀟洒なプレーぶりを見せられた。銘々伝を列べて居ると果てる処をしらない。そして最後に最も重要な人に登場願はねばならぬ。日商の西川社長である。人も知るオールラウンドプレイヤーであるが、当時は専ら庭球に力を入れて居られた。何方かといえば小柄の体軀で頗る頭腦的に技術をマークし、作戦的にも常に前衛を手足の如く指示し、大声を発し乍ら敵を掻乱する。

ロッピングが巧みで仲々の粘り屋であつた。高商へ行ってからは排球に鞍替えされたと聞く、大正年代の排籠、蹴の球技は未だ播籠の時期で一般的にはなじみも薄かつたがよく今日の繁栄にまで尽力を致され、現日本排球協会長の要職を全うして居られるのは余りにも有名であり、オ

辰巳会幹事一覽表

(○印は支部長)

会 長	高畑 誠一
本 部 幹 事	今村冬二郎 今村 頼吉 小倉 五郎 木畑竜二郎 橋本 隆正 畑 薫 柳田 義一 米田 幸吉
東 京 支 部 幹 事	○西川 政一 大幡 久一 小島 実 斉藤 虎吉 鈴木 丸衛 田代 義雄 山成 卓爾 益子 史朗 宮 三要
中 部 支 部 幹 事	○秋元 鷹男 伊藤 庄次 竹下富士松 伏見 俊助
四 国 支 部 幹 事	○東条 順吉 小松 豊秀 刈谷 勇馬 竹崎 浅吉 藤江 清治 伊達 信雄 鈴木 安一
九 州 支 部 幹 事	○木村 悌蔵 小樋井正夫 松本 得一 松本 通 森本兎之助 米倉 勇
北 海 道 支 部 幹 事	○町田 淑光 加地彦太郎 桜庭亥一郎 深谷 良一 本間 勇児 山口 義雄 横田 周作